



短歌結社「ひのくに」誕生90周年 ～有田が発祥の地～



昭和13年から16年までの「ひのくに」(一部)

有田皿山は陶芸文化の町ですが、文芸もまた盛んな土地柄でした。俳諧では県下最古・明和3年(1766)の「芭蕉塚」が陶山神社境内にあり、中の原の八阪神社には幕末の俳額や明治期の句碑が残っています。

殊に、男性は俳句や浄瑠璃語りを趣味とする人も多かったようですが、短歌もまた然り。大正8年(1919)の秋、白川の深川欧花(平治)を中心に、大樽の書店「金屋」の二階に町の文学青年たちが集う中で「若き日の短歌会」が発足。有田工業学校在学中の欧花や古賀勇、嬉野珠子・俊一姉弟などが中心メンバーでした。

翌9年から10年にかけて、県内各地に小さな歌会が出来ました。しかし、若い世代とベテラン歌人との間で論争が起り、この解決の糸口を探して奔走したのが佐賀毎日新聞社編集長の栗原荒野で、大正10年秋に武雄公会堂で第一回県下短歌大会が開催されました。これを機に翌11年7月1日に歌誌「火の国」が有田町1687番地(白川)を発行所として創刊されました。46版、36頁で定価30銭。この時が今に続く「ひのくに」の誕生でした。この名称については肥前の「肥の国」、あるいは焼き物と深い関わりのある「火の国」からとするなど諸説あります。

しかし、発足当初から入会の申し込みが低調で、印刷費のねん出にも苦労が続き、一時は発刊を見合わせる事態となりましたが、欧花が安い印刷所を見つけ、有田の歌人たちが彼を助けたことで危機を免れました。その後、4号までは香月明、杉本覚二、嬉野俊一らが発行を続けましたが、資金の裏付けが少ない上に学生や浪人などの身では続けて行く事が困難となり、4号限りで有田の歌人た

ちは編集発行から手を引きました。

それからは佐賀の歌人である高尾朝花、大石花晨、中島哀浪などが引き継いで大正12年までは発行を続けましたが、再度休止に。時を経て昭和3年、佐賀の大隈記念館で開かれた「佐賀短歌会」の席上で中島哀浪は「火の国」の復刊を宣言し、7月「火乃久爾」と字面を変えて発行しました。

有田の「ひのくに」歌人として特筆すべきは第二次世界大戦時の篠原高三の活躍でしょう。別名「戦場の歌人」とも称された篠原高三は、応召された戦地から陣中詠を送り続けました。その後、一度帰還した篠原は14年6月、東京・宮城外苑で天皇親閲の栄に浴しました。しかしながら再応召された16年12月8日、太平洋戦争開戦のまさにその日、マレー半島グラタン州コタバルでの敵前上陸で戦死しました。

戦後、21年5月に哀浪や三浦光弘、草市潤らが参画した「ひのくに」は「短歌圏」の誌名で復刊し、同年10月の合併号から「ひのくに」に戻りました。

34年に中原勇夫が編集を担当して「ひのくに35周年記念号」を発行、同37年には佐賀市川上で40周年記念大会を開催しました。41年、それまで会を率いていた哀浪が死去。47年に「ひのくに50周年記念大会」が開催され、52年には創刊500号記念の特別号が発行されました。

現在、「ひのくに」の代表は山野吾郎で、会員約140名。国内でも有数の歴史を持つ短歌結社「ひのくに」の始まりはこの有田で、11月には佐賀市で90周年が開催されました。[文中敬称略] (尾崎 葉子)



佐賀県の短歌や俳句、詩歌などに関しては「佐賀の文学」を参照しました。また、有田の短歌などに関しては有田町歴史民俗資料館叢書「有田皿山遠景」、「おんなの 有田皿山さんぼ史」を、篠原高三さんに関しては館報No.69をご覧ください。歌誌「ひのくに」はこの11月で931号となりました。

皿山

季刊

No.96

冬
2012

有田町歴史民俗資料館・館報



写真1 蒲生さんのご自宅にて

新寄贈資料

蒲生コレクション

—伝カンボジア出土の肥前磁器—

今年9月、当館は東京在住の陶磁器収集家の蒲生慎一郎さんより、カンボジアで出土した有田焼など70点の陶磁器コレクションの寄贈を受けました。蒲生さんは1947年生まれ、青山学院大学を卒業後、中央公論美術出版を経て、現在は東京で記章関連会社を経営されています。学生時代に故三上次男博士による天狗谷窯跡の発掘調査に参加されて以来、古伊万里に関心をお持ちになり、これまで世界に残る古伊万里を収集されてきました。今回、寄贈いただいた陶磁器コレクションはその一部で、カンボジアの内戦終結後、1996年にカンボジアを再訪して以来、2011年まで現地に通い続けて、カンボジアで出土した古伊万里を収集したものです。

碗です。魚の部分がすでに魚の姿を失い、宝珠となっている点も共通です。

コレクションに見られる肥前磁器の器種は、碗、鉢、皿、瓶、壺などがありますが、碗や鉢が大半を占めており、特に大碗（口径13.5～15.2cm）や鉢（口径15.5～23.5cm）が多いです。こうした特徴は、カンボジアだけでなく、タイでも見られます。おそらく、これらの地域の食生活や食文化を反映したものでしょう。



写真2 a
染付見込み荒磯文碗（景德鎮）



写真2 b
染付見込み荒磯文碗（有田）

コレクションは全て磁器で、大半が有田焼などの肥前磁器ですが、中国磁器も含まれています。中国磁器は16世紀後半～17世紀前半にカンボジアに流通していたもので、17世紀後半に中国磁器に代わって輸出を始めた肥前磁器のモデルとなったものです。写真2のa・bは代表的な例で、器の外面に竜を描き、内面の見込みに浪間から魚が跳ねている文様が描かれた



写真3
染付花虫文芙蓉手皿（有田）

また、皿にはヨーロッパ世界向けにつくられた芙蓉手の染付皿（写真3）が2点含まれています。当時のカンボジアの都のウドンの近くの河畔にはオランダ商館があり、商館向けに運ばれたものであつ

たのかもしれませんが。

現在、有田には日本国内向け肥前磁器の最大のコレクションである柴田夫妻コレクション、ヨーロッパに渡った有田焼などの蒲原コレクションなど、有数の陶磁器コレクションがあり、いずれも佐賀県立九州陶磁文化館に常設展示されており、日本国内やヨーロッパに流通した有田焼を見ることができます。一方、東南アジアなどその他の地域に渡った肥前磁器をまとめた形で見られるコレクションはこれまでなく、その意味でも蒲生コレクションはとても貴重な陶磁器コレクションと言えます。

来年度に蒲生コレクションを中心とした企画展を開催しようと準備に入っています。熱帯地方の食文化を彩った有田焼を見ていただく機会を設けたいと思います。
（野上 建紀）

歩こう隊の成果報告と伊能測量隊 200 年企画

平成 24 年 11 月 1 日（木）から、11 月 30 日（金）までの 1 ヶ月間、平成 24 年度企画展「歩こう隊の記録と伊能測量隊 200 年」展を開催しました。今年は、当館と伊万里市歴史民俗資料館、伊万里市観光ボランティアガイドの会、アリタ・ガイド・クラブとの共催という形で、展示の他にもイベントを行いました。それらの紹介をします。

伊万里津から有田街道を歩く

企画展に先立ち、平成 24 年 9 月 23 日（日）、やや涼しさを感じる快晴のこの日、伊能隊が測量した道を歩く「伊万里津から有田街道を歩く」を行いました。当初は 9 月 16 日の予定でしたが、台風接近のため延期した結果、歩くにはもってこいの日和になりました。

この日のルートは文化 9 年（1812）10 月 18 日（旧暦）に伊能測量隊が測量した道のうち、伊万里から曲川の追分までの約 12 km の道のりを歩きました。参加者 30 余名は、まず伊万里市歴史民俗資料館の企画展「伊能忠敬と伊万里」を見学し、測量隊のことを学んで、いよいよ 9 時からスタート。

所要所で、伊万里地区は伊万里市歴史民俗資料館の荒谷義樹副館長、有田地区は当館の尾崎葉子館長による解説を聞きながら約 5 時間かけて歩きました。

参加者の皆さんは、最初から最後まで興味津々といった顔で伊能測量隊の足跡を辿り、郷土の歴史探索を楽しまれました。中には 12 km もの道のりを歩き終



参加者の様子（伊万里市二里町）

えたにもかかわらず、「まだまだ歩ける」と言われた健脚な方もいらっしゃいました。幸いにも熱中症やけが人も出ず、好評のうちに終了しました。

企画展「歩こう隊の記録と伊能測量隊 200 年」

■ギャラリートーク

11 月 3 日（土・祝）、11 月 23 日（金・祝）の 2 日間、ギャラリートークを行いました。参加者は、伊能忠敬の偉業を見て感動し、また有田に残る地図資料などを熱心に見学されていました。

特に「歩こう隊の記録」についての展示の中で、今年の夏休みに行った、小学生を対象にした講座「歴史の川ざらい～ベンジャラを探そう」の成果発表を見て、「有田ならではの素晴らしい企画ですね」「子ども達は喜ぶでしょうし、有田の歴史も体感してもらえる、いい試みですね」といった声を聞きました。まさ



企画展を見学中の様子

に歩こう隊の活動を通して「子ども達に有田の歴史を伝えたい」という隊員一人一人の思いが、このような形で子どもたちへつながっていくことを嬉しく感じました。

■紅葉ライトアップと夜間開館

昨年の紅葉はずいぶんと遅く、12 月に入って色づいたのですが、今年は例年より少し早い 11 月中旬に見ごろを迎えました。ここ数年は、冷え込みが足りなかったり、台風で枝が折れたりして、ちょっと不振が続いていましたが、今年は見事に色づき、紅葉の美しさに惹かれて来館する方もいらっしゃいました。

今年は初公開された磁石場の紅葉と、当館の周辺がライトアップされ、たくさんの方が灯りに照らされた紅葉を楽しみながら散策したり、カメラに収めたりしていました。（永井 都）



紅葉ライトアップ

来館者の声

・とっても良い時に来ました！詳しいお話ありがとうございました。素晴らしい資料館です。（2012.11.3）
・伊能測量隊については古文書を見た記憶がある。ここ 200 年位前の測量です。現在は宇宙より観測の出来る時代で、科学技術の発展を痛感します。伊能地図はよく出来ていて、現在の技術の結果と大差はなく驚きです。偉い。どうやって調べたのかなあ？記録の大事さが資料を見てよく判ります。この企画に感謝しながらよく見ました。有難う。（11 月 7 日 Y.K）

マップが完成!!

「ぐるっと歩こう 有田皿山」 “150年前の有田皿山ば 歩こう隊”

今年最終年度を迎えた「150年前の有田皿山ば 歩こう隊」の活動を締めくくるものとして、「ぐるっと歩こう 有田皿山」のマップを作製し、このほど完成披露会を開催しました。

これは過去2年間の活動成果を、より分かりやすく、楽しいマップにして町民のみなさんに歩いていただこうという意図で計画、作成したものです。

以前、「歩いてみたい焼物の産地」という日経新聞の記事では、並みいる産地を押さえ、有田皿山は堂々の一位を獲得。これから、皿山散策をされる折にはぜひこのマップを手にして、400年の陶磁器産地の歴史を実感していただければと思います。

販売場所

- ・有田町歴史民俗資料館
- ・アリタ・ガイド・クラブ
- ・二宮閑山窯(有田駅前)
- ・陶山神社
- ・陶悦(岩谷川内)
- ・有田館

販売価格

- ・1部 500円



未来へ続け!

有田焼和絵具製造の伝統

平成23年度から3年間にわたり実施されている文化庁事業「国宝重要文化財等保存整備費補助金補助事業・文化財保存技術(伝承)」は、有田焼和絵具製造を手掛けている赤絵町の辻絵具店に対するものです。

これを受けて、辻公也・人之さん親子は先祖から伝承されてきた有田焼和絵具の製造を次世代に引き継ぐ方策を重ねています。

1年目の昨年は、種々の原料を使って発色などの研究を重ね、現在、2年目の補助事業では、各地の研究者との協議や原料産地の調査などを実施されているところです。

江戸時代から続く赤絵屋でもあった辻家は、明治期になって和絵具の製造と販売を手掛けられるようになりました。しかしながら、新しい原料や厳しい成分の規制などもあって、和絵具を取り巻く環境は厳しいのが現状です。

このような時代だからこそ、国としても伝統を守る必要性を重視され、実施されている補助事業です。来年度までの3カ年継続事業ですが、大きな成果が期待されています。

伝統的建造物に設置する 磁器製の表示プレートが完成

有田町教育委員会では、有田内山伝統的建造物群保存地区の伝統的建造物に設置するため、磁器製の表示プレートの製作準備を進めてきました。

表示プレートのデザインは、広く住民に関心をもってもらい、伝統的建造物の文化財的価値の再認識と町並み保存事業への理解を深めていくために募集を行い、118点の応募がありました。応募作品のなかから選ばれたのは、白川にお住まいの藤井和史さんの作品です。作品は、魔除けの意味や長寿を象徴する吉祥図形「亀甲」の中に、町木であり皿山のシンボルの「大いちょう」と町花の「桜」をあしらひ、白磁に染付の

落ち着いたデザインになっています。

縦14cm、横15cmの磁器製のプレート(左図)に、決定したデザインと保存計画番号や建築年代などを染付で表示し、伝統



的建造物の認識と確認が一目瞭然となっています。

10月下旬から、建物の所有者などと設置場所の確認をとりながら設置作業を進めていますが、秋の有田陶磁器まつりが開催された11月下旬までに設置して

いきたいと考えていました。

中には11月下旬までに設置ができなかった場合もありましたが、順次設置を予定していますので、ご理解とご協力をお願いいたします。



表示プレート設置の様子

(池田 孝)

季刊『皿山』

通巻96号(平成24年12月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL : <http://rekishi.town.arita.saga.jp>